No1.　こどもが集中して話を聞ける工夫

こども支援センターあすなろ　佐々木真緒　横山裕美　安西貴志　石川千裕

きっかけ

ちゅーもーーく!!
先生のお話聞きましょう！

どうやったら聞いてくれるのかな…？

あすなろ年長クラス（週一回の並行通園）では、保育者に注目して話を聞けない子どもが多く見られ、日々どうすれば保育者の話を注目して聞けるのか悩んでいました。
就学を控えた学年ということもあり、先生の話をしっかり聞く習慣を身につけて欲しいと考えました。
そこで、全職員に今までしてきた「集中して話を聞ける工夫」についてアンケートを実施し、その中から今年度のクラスに最適と思われる方法を実践しました。

方法と結果

「デカ耳」

具体物による**視覚支援**
リードの保育士は話している間、写真のように提示し続ける。

＜聴覚・視覚に働きかけた具体的な取り組みについて＞

「始まりの会」で着席し、「一日の流れ」について保育士が話をする場面で…

A　ベル
「今からお話をします。」と伝えてから、ベルを一回鳴らす。
保育士が話し終えて、ベルが二回鳴るまでは集中して聞くことを約束する。

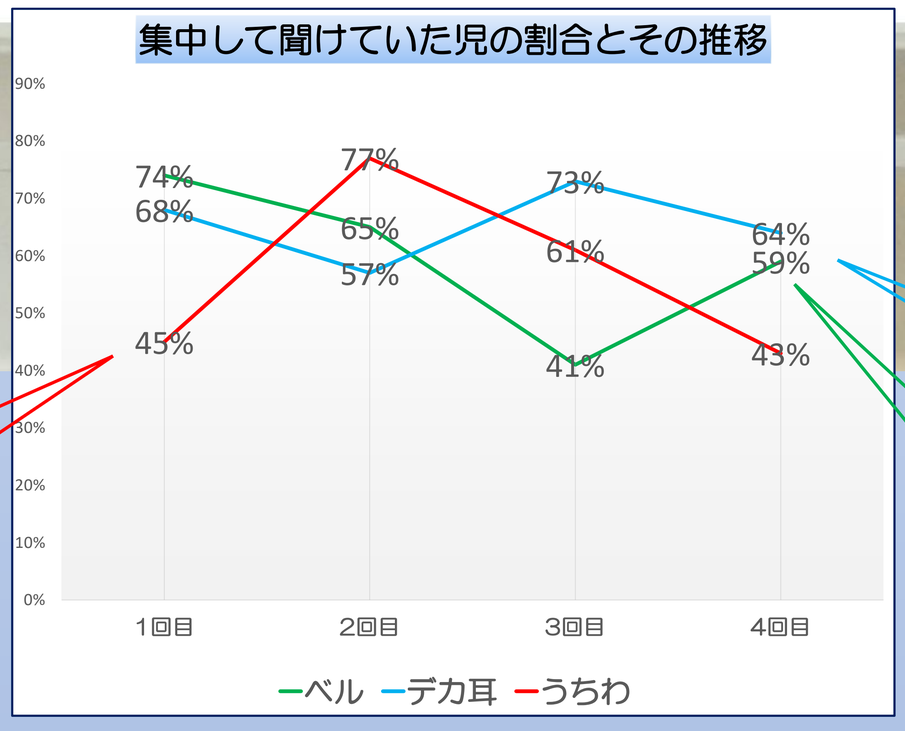
B　うちわ
保育士が「きく」と書かれたうちわを提示している間は、集中して聞く。
うちわを裏返し「はなす」と書かれた面を提示すると、質問などしても良い。

C　デカ耳
保育士が耳の玩具を提示している間は、集中して聞く。玩具を隠したら質問などしても良い。

⇒上記の方法を一週ごとに変えながら、それぞれ合計4週ずつ実施。
その日出席していた児の中で、集中して聞けていた児と、聞けていなかった児の割合を集計する。
集計結果から全体の傾向や最も有効な方法について検証する。また、改善点があれば検討する。

「ベル」

話し始める前に1回鳴らし、話し終えたら2回鳴らす。
聴覚支援。



「うちわ」

文字とマカトンシンボルによる**視覚支援**

「はなす」と「きく」を両面に記す。
ホワイトボードに貼って提示する。

少し離れた所に提示していた為注目が逸れる

保育者の顔の近くに提示した為どこに注目するかが分かりやすい

繰り返し取り組むことで音が鳴ったら話を聞く習慣がついた

考察とまとめ

- 単純に「集中して聞けていた割合」の平均値では「デカ耳」＞「ベル」＞「うちわ」の順になるが、全般的に今回の取り組み以前（言葉で話すだけだった時）よりも、視覚や聴覚に訴える道具を使うことで、聞くこども、聞こうと意識する子どもが見られるようになった。
- 一方、使用する道具に慣れて目新しさがなくなると、注目しにくくなる子どももいた。使用する道具はデータを取るために、敢えて継続的に同じものを使用したが、その都度違うもの（パペット、うちわ、耳、別の音等）を使って目先を変えることで注目を得られたかもしれない。ただし、それら使用する道具が子どもに与えるインパクト、刺激の強弱は慎重に吟味する必要があり、場合によっては逆に話に集中出来なくなる可能性も考えられる。
- 今回の取り組み結果からでは、実施回数や出席していた子どもの個性、「始まりの会」前後の活動内容からくる心理状態等の様々な要因もあり、単純に視覚支援と聴覚支援の間に優劣を付けられるほどのデータは得られていないと考えられる。

今後に向けて

今回はデータを収集する目的もあり、支援方法を「視覚」「聴覚」と分けて実施したが、集中を持続させるという目的のために有効ならば、状　況に応じて複合して使用していく。
今回試みた手法はあくまでも一例なので、騒がしい時には「敢えて沈黙して待つ」、先生が拍手２回し子どもが２回拍手したら話し始める（能　動的に参加）等、様々な方法を試していく。
全職員対象にアンケートを実施し様々な手法を知ることが出来たので、今回の取り組みの結果も踏まえながら施設全体として共有し、療育に活かしていく。